# 口調はアイロニーを理解する手がかりか？

## ── ウソと対比した非言語情報の果たす役割 ──

木　村　大　生

# Is Prosody the Cue of Understanding of Irony?: The Role of Non-Verbal Information Playing in Understanding Irony contrasted with Detecting Lie

KIMURA Taisei

幼い子どもにアイロニー[1]を言うと，それをウソ（lie）や欺き（deception）と受け取ることが多い（Winner, 1988)。アイロニーとウソは，その性質・構造の点で共通点があるが，大人はこの２つをたいてい難なく判別することができる。アイロニー理解に関する諸研究から，アイロニーとウソの判別，即ちアイロニーの理解は，高度な認知的過程を背景にしたものであることが明らかにされてきた。従来，アイロニー独特の口調などの非言語的信号が，アイロニー理解の有効な手がかりとして働くと考えられてきたが，実証的に確かめられたわけではなく，むしろ大きく見解が分かれている。そこで本稿では，口調（prosody）を中心とした非言語情報がどの程度アイロニー理解にあたって「手がかり」としての有効性をもつのか，関連研究を見ていく。最後に，ウソと関係の深い「情報源の制御の階層性」の概念が，非言語情報の発信とアイロニー理解を考える上で良い手がかりとなる可能性を考察する。

### １．アイロニー観の変遷

(1) Searle・Grice 流のアイロニー解釈

例１

私は大学のサークル友達のＢ君に明日の試験のノートを借りようと思って，
Ｂ君に「明日の試験のノート，貸して」と頼んだら，Ｂ君は「俺，その授業
さぼっててノートほとんど無いんだ。御免。」と私に答えました。
すると私は「おまえは本当に頼りになる奴だなあ。」と言いました。

上の「おまえは本当に頼りになる奴だなあ。」という発話は，“私” にとってみれば試験直前にノートを当てにしていたＢ君に裏切られた形となったのだから，「Ｂ君」に対して「本当に頼りになるいい友達」と特に言える筈がない。このような発話はアイロニーとよばれ，次のように定義される。「アイロニーは一般に，発話されたこと以上のことを発話者が意味する非字義的言辞

の形で使用される。(Dews & Winner, 1995)」。あるいは次のように「現実と発話の字義通りの意味の不一致 (Kreuz & Roberts, 1995)」と，発話指示事態と発話内容の不一致（修辞的なズレ）を基に定義する場合もある。

歴史的にはギリシャ時代より知られているアイロニー（エイロネイア：元来卑小を意味するもの：橋元，1989）であるが，現代言語学においては，アイロニー研究は長期間無視されてきた経緯がある。旧来の言語学の中心は音声学・音素学であり，チョムスキー以降は統辞論であった。これは意味や意図を扱えない言語学であったと言える。一方，アイロニーは「言外の意味」であり，発話者の意図を抜きにして論じられない。1970年代以降，Searle の発話行為論や Grice の会話原則の登場により，アイロニー研究がはじめて可能となり，現在に至っている。

Searle・Grice の語用論からの見解では，発話はコミュニケーションを継続させるように行われるという前提があり，その前提を話し手が破るものとしてアイロニーが解釈される。

先ずサールの見解を見ておきたい。

「「ある発話行為に皮肉がかぶさるのは，文字通りに遂行されるはずの発話行為のためのＦＣ（適切性条件）が不成立の場合である」と大江はいう。そして「皮肉がかぶさると」二次的行為とは「反対的な」一次的行為が派生する」(橋元，1989，p. 53.)

次に Grice (1975) は会話的含意の概念から発話意図を考えようとし，アイロニーも会話的含意の一つと考えた。そして会話原則の中の質の格率[2] によって解釈されるとした。Grice (1975) が挙げる例を橋元 (1989) の訳によって以下に見てみたい。

> Ａの親友Ｘが，職務上のライバルにＡの秘密を暴露した。その事実は，Ａもそしてその時の発話相手であるＢも知っている。ＡがＢに「Ｘはすばらしい友達だよ」と言う。この場合，Ａの発話内容がＡの心情の実態を表していないことはＡにもＢにも自明である。ＡにＢとのコミュニケーションを成立させる意志があり（協調原則を守り），したがって，Ａがまったくデタラメなことを言ったのではないとすれば，字義通りの陳述内容以外のことを含意していたに違いない。この含意が陳述内容と何らかの関連をもつはずだとすれば，含意内容は陳述とは逆の意味の「Ｘはひどい奴だよ。」というものである。

こうしてサール・グライスの語用論において，アイロニーが研究の対象となってから，もっぱら字義性・非字義性あるいは直接性・間接性と推論の概念によって，解釈されることが多かった。こういった語用論による解釈は後に Gibbs (1986) によって標準語用論モデル StandardPragmaticModel と呼ばれることになる（以下，Gibbs にならい標準語用論モデルと呼ぶ)。Gibbs が要約するところでは，「字義通りの意味の分析がはじめにあり，そして発話の比喩的 (figurative) 解釈は聞き手あるいは読み手の文脈の理解とのいくつかの規則に従って引き出される。(Gibbs, 1994, p. 83.)」つまり，このモデルでは，必ず最初に字義通りに発話を解釈しなければならないという，理論上の複雑性と硬直性を抱えている。実際，言語心理学的実験によって，このモデルの妥当性が疑われる結果が見出されている。例えば，Gibbs (1983) では文の読み時間による反応時間の実験パラダイムで，皮肉的表現とその直接的表現を比較した。その結果，皮肉的表現の

方が発話意図の理解に要する時間が短かったのである。この結果は明らかに語用論モデルの予想と異なるものである。語用論モデルは，はじめに字義通りの発話解釈を行い，ついで様々な会話規則にのっとって，複雑な推論によって発話意図を引き出すと考える。従って，推論の段階で，直接的表現よりもアイロニーの方が時間がかかると予想される。他にも Jorgensen, Miller, & Sperber (1984) をはじめ，標準語用論モデルでは説明のつかない実験結果がいくつも提出されている。

(2) 言及理論（Mention Theory）

それまでの標準語用論モデルとは全く異なる角度でアイロニー現象の説明を試みたのが，言及理論（Mention Theory：Sperber & Wilson, 1981）である。これは「アイロニーは言語の使用（use）ではなく，言及（mention）である。」あるいは「アイロニーは反復（エコー）によってなされる態度表明の字義的表現である」という言及理論（Mention theory：Sperber & Wilson, 1981：Jorgensen et al., 1984）である。

例 2

A：私は今まで天賦の才だけに頼ってきたことが誤りだと初めて気付きました。

B：ほおう，天賦の才ねえ

（橋元，1989）

このBの「ほおう，天賦の才ねえ」の発話は，Aの「天賦の才」をそのまま引用・反復しただけである。そして，この単純な反復すること自体がAのBへの侮蔑的態度表明であると考えられるのである。字面を見る限りは，どこにも非字義性は見当たらない。従って，多くの論者はこの理論を字義的発話によるアイロニーとみなし，非字義性を基にしている伝統的アイロニー観と区別する（Gibbs, 1994；橋元，1989等)。この言及理論を支持する実証的研究は既にいくつも出されている。先に挙げた Gibbs (1983) は，実はこの言及理論を検証する実験でもあった。標準語用モデルでは，アイロニーの理解において何らかの規則に従った複雑な推論過程を想定する。しかしこれでは直接的表現よりも皮肉的表現の方が理解が早いと言う結果を説明することが困難である。

## 2．アイロニー理解の発達と理論

子どもがアイロニーを理解できるようになるまでの過程は，それほど明らかにされていない。Demorest らは非字義的アイロニー発話を使用して，子どものアイロニー獲得の研究を行った。(Demorest, Meyer, Phelps, Gardner, & Winner, 1984; Demorest, Siberstein, Gardner, & Winner, 1983)。その結果，通常13歳頃まではアイロニーを欺き（deception）と間違えることが明らかとなった。Winner はアイロニーの理解の発達から，認知における推論過程をモデル化した。Winner (1988) によれば，アイロニーの理解には，【1．事実と発話の間のズレの認識，2．話し手の信念の認識，3．話し手のコミュニケーション上の目的の認識】の各段階が欠かせないことを想定している。各段階の認識の発達とアイロニーの理解の発達が対応していることを

明らかにした。そして9歳前後を境に理解能力は飛躍的な増大を見せ（橋元良昭・村田光二・広井脩，1985），13歳頃までには，ほぼ成人と同様の水準に達することが明らかになった。

## 3．ウソに関する定義

ウソは日常的にありふれていることが手伝うのか（Kashy & DePaulo，1996），アイロニーのようにそれ自体を単独に研究対象とされることが少なかった。むしろ〈意味〉や〈真偽〉といった関連で哲学・言語学・意味論等の方面から様々な角度で研究がなされてきた。アウグスティヌスは偽りの意図，言いかえると「二重の思念」がウソの文の背後に存在する時に，ウソが存在すると見なした。一方 Weinrich（1967）によると言語学では，ウソの文の背後にそれと矛盾する，即ち，イエス・ノーの主張形態素だけ相違する（隠れた）本当の文が存在する時に，ウソが存在すると考える。したがって，「二重の陳述」がウソのしるしとなる。心理学では言語心理学以外との関連で扱われることも多かった。例えば，ウソを単に事実に反する発話として定義し，ウソを発見する場合の手がかり探しの研究材料として扱われてきた（e. g., Ekman & Friesen，1974)。本稿で焦点とするのはアウグスティヌスが指摘した話者の意図である。例えば，DePaulo, Kashy, Kirkendol, Wyer & Epstein（1996）では，「ウソはあなたが故意に誰かをごまかそうとする（try to mislead someone）時に生じる。」と，定義し，日記と実際の行動の食い違いからウソを検出し，分類した。そこで本稿においては「故意に誰かをごまかそうとする。」ことをウソであると定義しておく。

## 4．アイロニーとウソ

### (1) 「話者の意図」によるアイロニーとウソの対比

さてアイロニーとウソを対比させる軸となるのが「話者の意図」である。ここで Leekam（1991）の「誤った発話」の分類を参照したい。彼女は「心の理論」研究の枠組みの中で，誤った発話（false statement）を分類した。この誤った発話とは，言い誤りからウソ・冗談・アイロニー等の修辞的表現まで発話とその発話指示事態が一致しない発話のことを指す。ここで，Leekam は話者の意図を一次的段階と二次的段階の二段階に分けた。即ち，一次的段階では，意図的に誤った発話を行う場合と意図せずして行う場合があり，後者（意図せずして行った場合）は，「言い間違い」となる。意図的に誤った発話を行った場合，ウソや冗談，アイロニーをはじめとした様々な表現が考えられる。そこでさらに二次的段階として話者が聞き手に誤った発話（一次的意図：first-order intention）を信じさせる意図（二次的意図：second-order intention）があるのがウソであり，一方逆に誤った発話（一次的意図）を疑わせる意図（二次的意図）があるのがアイロニーであるとされる（図1）。見方を変えるなら，アイロニーの場合には「聞き手に自分の真意を伝達する」意図（二次的意図）があるのに対し，ウソの場合には「聞き手に自分の真意を隠す」意図はあっても，「聞き手に自分の真意を伝達する」意図（二次的意図）はないと考えられる。

### (2) 「反語信号」によるアイロニーとウソの対比

さて，話者の意図から派生する話者の態度によってもアイロニーとウソを区別することが可能

かもしれない。既述のように，アイロニー発話には「聞き手に自分の真意を伝達する」二次的意図）があるものと考えられる。一方，ウソには決して「聞き手に自分の真意を伝達する」二次的意図など考えられない。従ってここで，「反語信号（irony signal）」（Weinrich，1967）によって両者を区別するという主張，即ち「聞き手に自分の真意を伝達する」二次的意図の有無が反語信号の有無を決定する，といえるかもしれない。「反語信号」とはWeinrichによれば，「目のウインクであることもあるだろうし，咳払い，強声，特別な語調，大袈裟な表現のたたみかけ，大胆なメタファー，長すぎる文，語彙の反復，或いは－印刷されたテキストであればイタリック活字体，引用符であることもある。(Weinrich，1967，p. 106.)」と述べ，信号は様々な形態を取り得るとした。同時にアイロニーには常に反語信号が伴うと考えられている。それをここで仮に特定の語調と限定した場合，信号は聞き取られることもあれば，聞き漏らされることもあるという性質のものであり，そのこと自体は話し手の責任ではなく，機知を解する聞き手の責任であると明快に述べている。このことは非言語情報の解読能力に個人差があることを考慮すると，心理学的に妥当と言える。橋元（1989）はWeinrichの意見をうけ，また自ら行った実験から「言及を告知する装置は反語信号以外に考えられない（橋元，1989，p. 77)」，「反語信号」によってのみアイロニーとウソの区別が可能となる，と強く主張している。この橋元の主張は言及理論を念頭においてなされているが，アイロニー発話には発話者の聞き手に対するアイロニー伝達の意図，ただ1つしか想定されていないという限界がある。この点について，本稿の最後で触れることにする。

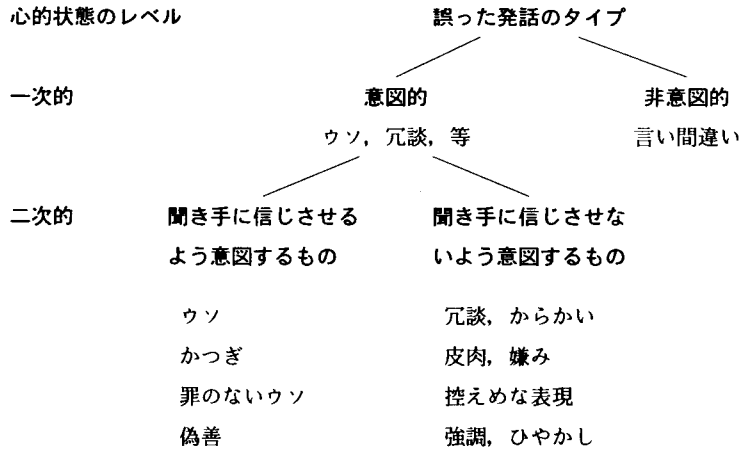


図1　誤った発話の分類（Leekam，1991）

（注）図中では原文のironyとsarcasmを各々，「皮肉」「嫌み」に訳した。

## 5．非言語情報を伴ったアイロニー発話の理解

先ずアイロニーに特有の非言語情報として欧米では，口調に注目されることが多い。実際，実証的研究によってその存在も確認されてきた（Cutler，1976)。Cutlerによるとアイロニーに特

有の口調は強勢・遅いテンポ・鼻音によって特徴づけられる。一方，日本ではアイロニーに関する研究の層自体が薄いのに加え，日本語がもともと抑揚の点で平板であるという特性もあり，そういったアイロニー固有の非言語情報が確認されていない。

本節では「アイロニーに固有の口調（prosody）がアイロニーの理解を促進する手がかりとなるのか？」という問題関心の下に関連研究を参照する。但し，口調が伴わなくとも，アイロニーの理解に差し支えない点を留意しておかねばならない（Gibbs & O'brien, 1991)。

残念ながらアイロニー研究の中でも非言語情報との関係を考慮した研究は未だ少ない。関連する研究は，ほとんど発達的観点より行われている。

従来，標準語用論モデルでは，口調がアイロニー理解に関与し，同様に言語心理学的にも「口調は発話を文脈に統合する手助けとなっている。(Ackerman, 1982)」と考えられてきた。では実際のところはどうなのか，先行研究を見ていきたい。

① 口調がアイロニーの手がかりとして認められなかった研究

Ackerman (1981) がアイロニー理解の研究では初期のものである。通常アイロニーとウソの判別を子どもにさせる際には，アイロニー・欺き・真実・間違いで終わる短いおはなしを聞かせる。この実験では6歳・8歳・成人が対象となった。アイロニー発話では嘲り（mocking）の口調により提示し，他の発話ではまじめな口調で提示した。後述する Winner & Leekam（1991）と同様に事実・態度・信念質問によりアイロニー理解を尋ねた。しかしこの実験では，設定上口調がアイロニー理解に与えた影響を検討することは無理であった。しかし，口調を伴ったアイロニー発話を6歳児が誤った発話と受け止めることが明らかとなった。

Winner & Gallagher (1983) では成人を対象にし，口調と身体的手がかりを取り上げ，アイロニー理解にとっての重要性を比較検討している。ここで言う身体的手がかりとは，指さしや笑いである。結果は口調よりも身体的手がかりの方が情報価が高いというものであった。

Winnner & Leekam (1991) では5歳児から7歳児63人を対象に，アイロニーとウソの判別を個別に行った。この研究は本稿と深く関係するので，ここで立ち入って紹介することにする。この研究では最初に状況として，次のことが被験者に説明された。

「ピーターは兄のサムと出かけて一緒に野球をしたいのです。しかし母親は，まずその前に自分達の散らかっている部屋を片づけなさいと言いました。サムはすぐに自分の部屋を片づけ，外へ出ました。ピーターは掃除はそっちのけで，新しい漫画を読みふけっていました。」

ここで，散らかっている部屋で弟のピーターが漫画を読んでいる脇で兄のサムが，階下のお母さんに向かって「ピーターは大掃除をしたんだ。」と言う絵刺激を提示する。あるいは散らかっている部屋でピーターが漫画を読みふけっているところにサムとお母さんが並んでやってきて，サムがお母さんに「ピーターは大掃除をしたんだ。」と言う絵刺激を提示する。サムの発する言葉はどちらも全く同一だが，脈絡の上で前者はウソとなり，後者は皮肉となる。この2つの絵のどちらかを見せて，子どもに〈事実質問〉「ピーターの部屋は散らかっていますか？」等によって絵の内容の理解の確認をしながら，2つの質問を行った。第1は〈態度質問〉であり，「お兄さんが弟に意地悪しているのはどちらの絵でしょう？」。第2は〈二次的意図の質問〉である。

これは「部屋が本当はどれだけ散らかっているかを，お母さんに知ってほしいと兄のサムが思っ

ているのはどちらの絵でしょう？」ここで注目すべきは，テープレコーダーを併用し，口調の要因をも同時に検討していることである。

結果は皮肉を理解することができた者は（態度質問に正答した者）は約半数であり，正答者は同時に二次的意図の質問に正答する場合が多かった。言い換えると，皮肉を理解するためには，二次的意図の理解が必要と考えられる。ところで，この研究では，口調によるアイロニー理解の促進の効果は一切見出されなかった。

次に Winner, Windmueller, Rosenblat, Bosco, Best & Gardner（1987）では6歳，8歳，10歳児を対象に，モダリティーを考慮した実験を行った。即ち，文章提示による実験（8歳以上）とビデオを使用した嘲りの口調を伴った音声提示条件の実験を行い，両条件を比較した。その結果，事実質問・信念質問・意図質問いずれも条件間に差が見られなかった。

② 口調がアイロニーの手がかりとして認められた研究

先ず Ackerman（1983）では6歳児，8歳児，成人（各36人）を対象に，強勢・否定的な声のアイロニー発話とニュートラルな声によってアイロニー発話の理解を比較した。口調の効果は一部に見られた総じて口調よりも文脈情報の方が，アイロニー理解の良い手がかりであることを示した。

Demorest, Meyer, Phelps, Gardner, & Winner（1984）では，6歳児,，9歳児，13歳児の各32人の子どもと13人の成人を対象に研究を行った。この研究では短いやりとりを含んだ12のおはなし（1つのおはなしは10文程度で，最後の言いまわし（remark）が7ないし8単語よりなる）をテープに身振りやその他の非言語的態度（1あるいは2文）を吹き込んだものを用意した。さらに，各々のおはなし毎に色付き背景と人物像を同時に提示した（この視覚刺激は単に被験者の注意を持続させるためにもちいられたものであり，表情は描かれていない)。被験者の課題は実質的に，おはなしの事実・話者の信念・話者の信念を判断した根拠・話者の目的・話者の目的を判断した根拠に関しての計5質問に答えることであった。結果は，発話内容そのものが最大の手がかりであったが，年齢が上がるにつれ発話の利用が減り，身振り・表情・イントネーションの手がかりの利用が増加することが見出された。

Cappelli, Nakagawa, & Madden（1990）の研究が，アイロニーを理解する上での口調の促進効果を確かめる試みの中で，最も分かりやすい形で促進効果を示している。そこでその実験手法を詳細に見ていきたい。この研究は3年生と6年生各32人ずつと大学生16人を対象として行われた。被験者はテープに吹き込まれたおはなしを聞かされて，質問に答える形となっている。おはなしの母体と終わりは別々に録音された。おはなしの母体には終わりと一致する文脈あるいは一致しない文脈が含まれている。また終わりの言いまわしはアイロニカルとニュートラルの2種類の語調があった。2種類のおはなしと2種類の終わりの言いまわしが組み合わさることにより，次のような4条件が構成された。1．手がかり無し（ニュートラル文脈・ニュートラル口調)，2．文脈のみ（不一致文脈・ニュートラル口調)，3．口調のみ（ニュートラル文脈・アイロニカルな口調)，4．両方（不一致文脈・アイロニカルな口調)。実験は個別に行われ，被験者は全員，8つのおはなしを聞かされた。課題は単純であり，テープのおはなしを聞き終えた各被験者が，「おはなしの中の人がどうしてあのような発言をしたのか？」という実験者の問いに答える

ものだった。また同時に判断の根拠も尋ねられた。

結果は年齢に関わらず，判断根拠に口調への言及が挙げられていたが，年齢が高くなるほど，その度合いが増した。しかし興味深いことに実際のアイロニー理解の成績を手がかり条件別に見ると，文脈手がかりのみ条件で，成人はほぼ確実にアイロニーを理解している一方で，6年生では成人に比べるとかなり理解が困難になり，3年生ともなるとほとんど理解できなかった。しかし，6年生と3年生は口調の助けを借りると，アイロニーの理解が困難でなくなることが示された。特に注目したいのは，口調のみ条件で3年生，6年生，成人と年齢に関わりなく発話をアイロニーと判断することができたのである。3年生でも約7割近い成績を収めることができ，成績には年齢による大きな違いが認められなかった。つまり口調からだけでも相当アイロニーが判別できることが示された。

これまで挙げてきた例はいずれも，被験者のアイロニー理解の結果を問う研究であった。Rosenblatt, Swinney, Gardner, & Winner (1987) はイントネーションとアイロニー理解の過程を反応時間パラダイムによって研究した。嘲り，嫌み (sarcastic) な口調で話されたアイロニーと平板な口調で話されたアイロニー発話の処理について検討した。対象は7歳児，9歳児，成人であった。被験者は簡単なおはなしを見せられ，そのおはなしの最後にアイロニーか字義通りの発話を聞かせられる。最後に，一文が提示されるので，被験者はできるだけ早くその文が発話と意味が一致しているかどうかを判断し，ボタンを押す課題を行った。

結果は成人においてはあざけりの口調のアイロニー発話は，字義通りの発話よりも短時間で理解されることが分かった。それに対して，平板な口調のアイロニー発話は，字義通りの発話と同程度の速度で処理された。子どもの場合，統計的有意にこそならなかったものの，嘲りの口調のアイロニー発話の処理が，平板な口調のアイロニー発話ならびに字義通りの発話の処理よりも速いという傾向が見られた。

最後に「口調がアイロニー理解を促進するか否か？」という視点ではないが，口調とアイロニーを関連させた研究に Kreuz & Roberts (1995) が挙げられる。この研究はアイロニーに伴う口調が強調の口調とよく似ていることに着目したものである。そして，強調と真実性の2要因を操作した実験から，アイロニーは誇張の一種ではないかと結論付けている。但し，この実験は被験者におはなしを読ませて，アイロニーの程度を判断させるという実験手続きを取っており，実際には音声刺激を提示していない点でやや説得力に欠ける。

## 6．ウソと情報源の制御の階層性

4(1)節で見たように，アイロニーは誤った発話を疑わせる（＝「聞き手に自分の真意を伝達する」）二次的意図の存在が前提となって成立している。一方，ウソは誤った発話を信じ込ませる（＝「聞き手に自分の真意を隠す」）二次的意図がある。本節では Ekman & Friesen (1969a) の「非言語的漏洩 (non-verbal leakage)」説から始まったウソ判別課題による手がかり研究を基に，アイロニー理解において口調を含めた様々な非言語的情報源の果たす可能性を考えてみたい。

非言語的漏洩説では，身体各部位が持つ情報伝達容量は3つの指標によって測ることができるとした。3つの指標とは，平均伝達時間，再現できる弁別可能なパターン数，可視性を指す。こうした指標に従えば，顔が最良の情報源であり，足や脛は最低となる。なぜなら顔面筋の動きは

大変敏速であり，多様な表情変化を可能にさせているが，足や脛の動きは決して素早いとは言えず，動きも限定されている。しかも足元は，家具などに隠れることが多い。

Ekman と Friesen は顔の持つ豊富な伝達容量から，人はウソをつくときには自分の顔面表情の制御により多くの注意を傾けるだろう，従って，ウソやごまかしは足や脛の動きを通して，「漏洩」するだろうと仮定した。先ず精神病患者を撮影した音声無しの映画を刺激とし，被験者は患者について判断する実験を行った（Ekman & Friesen, 1969b）。1 被験者群には患者の顔だけ提示し，もう 1 被験者群は首より下を提示され，形容詞リストによって患者の感情と態度の判断が求められた。狼狽を隠そうとした患者の場合，顔面表情は肯定的に評定されたが，身体動作は否定的に評価されることが多いことが明らかになった。この結果は彼らの仮説を支持している。

続いて Ekman & Friesen (1974), Ekman, Friesen, & Scherer (1976) で厳密な検討を加えたが，いずれも「ウソ（ごまかしをしている）をついている時には顔面表情の統制に多くの注意を払う」という非言語的漏洩仮説を支持した。なお，Ekman et al. (1976) でウソをついている時の方が正直に話している時よりも声が高くなることが見出された。他の様々な見地も踏まえて Ekman, Friesen, O'Suillivan, & Scherer (1980) では，非言語的漏洩説から発展させた「情報源からの真の情報の漏れやすさの階層性（leakage hyerarchy)」を提唱した。これは「情報源の制御困難の階層性」と読み替えることができる概念である。例えば，子どもはウソ等の一貫しない情報を受け取ると，より信頼のおける情報源に注意を向けるようになるが明らかにされている (Blanck & Rosental, 1982 ; Rosenthal & Blanck, 1979)。信頼のおける情報源とは意識的に制御することが困難で真の情報が漏れやすい（leaky）表出行動と考えられている。そしてこの表出行動に次のような漏れやすさ（あるいは制御のしにくさ）の階層（leakage hyerarchy）があると考えられている。ウソつきは聞き手にウソがばれないように，話す内容に最も注意を払い，次に情報源の中で一番目立つ顔の表情を制御しようと試みる。この表出を抑える試みに身体部位による順番があると考えられている。しかし，人はそう一度に多くのところに注意を払うのは無理なので，必ずと言って良いほど，どこか（声，手，足等）に綻びが出てしまう（Ekman, 1985)。

## 7．結　び

先ずアイロニー理解における口調の効果は今まで見てきたように，必ずしも一致していない。Cappelli et al. (1990) で口調のみの手がかりでも，アイロニーを判別できるのはある意味で当然とも言える結果である。重要なのは，成人は口調の情報無しでも十分にアイロニーを理解できるが，子どもは口調の情報の助けを借りないとアイロニーの理解が困難になる点である。では口調によって子どもはアイロニー理解のどの側面が助けられるのだろうか？発話と事実の不一致の検出だろうか？ Ackerman (1981) では 6 歳児で既に口調を伴ったアイロニー発話を誤ったものとして認識する能力があることが示している。しかし 5 歳児から 7 歳児を対象とし Winner & Leekam (1991) では口調の効果を見出すことができなかった。彼らはこれについて「口調の違いを知覚できていなかった可能性」と「口調を知覚していたとしてもその意味を理解していない可能性」という 2 つの可能性を挙げている。未だ研究の知見が浅く，同時に研究方法にも問題点

が見られる現時点では，考察も困難である。Ackerman (1982) は文脈と統合する段階で口調が促進要因として関与すると考えているが，今のところ，この説を明白に支持する研究が見あたらない。しかし，今後とも注目すべき観点である。Cappelli et al. (1990) が明確に口調が子どもにとってアイロニー理解の手がかりとなることを示しているが，同時に成人になるとほぼ不要になることも示した。しかし成人が口調を全く手がかりとしていない訳ではない。Demorest et al. (1984) は年齢が上がるにつれ，アイロニー判断時に非言語的情報の利用が増大することを，質問を通じて同時に見出した。

現在までに得られた知見からアイロニー理解と（口調も含めた）非言語情報を関連付けるには，Cappelli et al. (1990) のような情報源を考慮した研究が参考になるだろう。また現時点では反応時間パラダイムをもってしても，口調によりどの側面の処理が促進されたのか明白にならない。従って，またオンライン処理の過程を反応時間パラダイムにより検討した Rosenblatt et al. (1987) の実験もさらに手法に工夫を重ねる必要がある。

さらにどの先行研究についても当てはまることだが，口調刺激の扱いに問題があるように思われる。実験者がアイロニーに伴う口調を嘲りの口調と定義し，統制条件を平板な（deadpan）口調あるいは普通に話す口調と定義する。多くの実験では実際に刺激がこのように作成されたという確認の作業を行っておらず，また被験者が聞き分けることができたという確認作業も行っていない。実験対象者に子どもが多いだけに，非言語情報の解読能力の発達を考え合わせると，こうした確認作業は欠かせないと言える。従って Winner & Leekam (1991) の述べる 2 つの可能性の検討はこうした確認作業があってはじめて可能となると考えられる。

口調をアイロニーを理解する際に手がかりとすることが，従来考えられていた程でもないことが，諸研究を通じて明らかになりつつある。しかしこの結果は我々の日常経験からいえば，どことなくそぐわないものと感じられる。我々は日常，使用し得る非言語情報を存分に活用しているのではないだろうか？そこでウソと対比して，アイロニーに伴う非言語情報の利用を論じてみたい。ウソの研究を通じて「情報源の制御の階層性」なる概念が提出され，実際それを確認する研究もあることは既述の通りである。ここで，図1においてウソとアイロニーを誤った発話を疑わせる「二次的意図」の有無によって分類し，同時にアイロニーの二次的意図には反語信号を伴うとしたことを思い起こしてもらいたい。というのはウソを聞き手が信じてくれるようにひたすら余計な情報を与えまいとし，その結果，話者の思惑とは逆に声が上ずったり，と余計な尻尾を出してしまい，結局本当のことがばれてしまう (Ekman, 1985)。ここでアイロニーとウソにおける「情報源の制御」について考えるなら，ウソでは情報源から発話を裏切らない余分な情報を出さないように気をつけるのであり，アイロニーでは発話とは関係のないところで，あえて聞き手の注意を引くために非言語的情報を発する可能性がある。反語信号がほぼこのような趣旨の概念である。従って制御の意味合いがウソとアイロニーで異なってくることが考えられる。つまり「聞き手に真意を伝達する」意図があるアイロニーでは，対面状況でのコミュニケーションを想定するなら，話者は口調のみならず様々な情報源を巧みに動員してアイロニー発話を行うと考えるのが自然である。この場合の制御は真意の「伝達」である。一方ウソも口調を含めたあらゆる情報源を巧妙に操作する試みを行うものと考えられるが，「聞き手に真意を隠す」意図から，その制御の意味はまさに真意の「隠蔽」以外の何物でもない。逆にすると，情報源の制御の階層性

と聞き手に対する効果を考えるなら話者は先ず顔面表情と口調を発話時に変化させる可能性が高い。しかし，これまでの実験が示すように少なくとも口調情報自体は大きな手がかりとなっていない。また，顔面表情の検討は未だなされていない。あるいは口調・表情は目に付きやすい情報なので（アイロニーの性質上，表現は目立ちすぎてはならない），もう少しわかりにくい情報（例えば顔の向きや体の角度）といった情報が発せられているかもしれないが，意外なことにアイロニー発話の際の発信情報の研究は皆無である。非言語的情報とアイロニー理解を関連付けるならば，聞き手を対象にした研究ばかりでなく，話者の側の発信情報の分析も必要となろう。

さて最後にアイロニーを理解するのは聞き手であるが，その聞き手が発話理解の主体であることを確認する研究がGibbs（1995）によって行われた。そこでは話者がアイロニーと意図しなくとも受け取る方はアイロニーと受け取ることが明らかになった。それは状況・話者等等から聞き手が推論するものと考えられるという。石野（1996）はコミュニケーション論的観点から実験を行った。この研究では被験者であるあなた・発話者・第3者の人物設定を行い，発話状況を変化させた。やはり，アイロニーは聞き手が置かれた状況により受け取り方がかなり異なるという結果を見出した。Sperber & Wilson（1995）では，発話理解は聞き手が主体であり，様々な条件の下で自由に解釈の手がかりを選択することができるという，という主張がなされている。聞き手が手がかりを自由に選択できるという，関連性理論は今後の非言語情報を関連させた発話理解の研究の良い足がかりの1つを提供しているように思われる。

ところで，本稿も含め従来の研究では，アイロニー発話では発話者のアイロニカルな単一の意図のみが前提されてきた。しかし，例1の「おまえは本当に頼りになる奴だなあ」では，他に「頼りになってくれれば助かったのに」あるいは「今回はあてにならなかったけれども，いい奴だということはよく分かっている」と幾つかの意図を含ませている可能性があり，発話者が1つの発話に複数の意図を重複させていることが大いに考えられる。今後の研究課題であり，非言語情報と関連させることで，話者の「意図」により接近することができるのかもしれない。

## 註

1）irony は日本語では通常「皮肉」と訳されることが多いが，場合によっては「反語」とも訳されることがある。「皮肉」と「いやみ」の概念の区別が曖昧であることも手伝い，irony の語については未だ定訳がない。したがって本稿では「アイロニー」と表記した。なお他にも，irony と似た概念で sarcasm が存在することに留意する必要がある。irony は発話とその指示事態とのズレによって定義され，必ずしも相手への攻撃的態度を含むものではない。一方，sarcasm は相手に対する攻撃的態度によって規定される（Kreuz & Glucksberg，1989；石野，1996）。

2）「信憑性を持ち，自分が正しいと思う情報を提示せよ。」ということを意味する。

## 引用文献

Ackerman, B (1981) Young children's understanding of a speaker's intentional use of a false utterance. *Journal of Experimental Child Psychology*, 31, 487-507.

Ackerman, B (1982) Contextual Integration and utterance interpretation: The ability of children and adults to interpret sarcastic utterances. *Child Development*, 53, 1075-1083.

Ackerman, B (1983) Form and function in children's understanding of ironic utterances. *Journal of Experimental Child Psychology*, 35, 111-127.

Cappelli, C., Nakagawa, N. & Madden, C. (1990) How children understand sarcasm: The role of context and intonation. *Child Development*, **61**, 1824-1841.

Cutler, A. (1976) Beyond parsing and lexical look-up: An enriched descrption of auditory sentence conprehension. In (Eds.) R. J. Wales & E. Walker, New Approacheas to *languagage mechanism: A collection of psycholinguistic studies*. (pp. 133-149.) Amsterdam: North-Holland.

Demorest, A., Meyer, C., Phelps, E., Gardner, H., & Winner, E. (1984) Words speak louder than actions: Understanding deliberately false remarks. *Child Development*, **55**, 1527-1534.

Demorest, A., Silberman, L., Gardner, H., & Winner, E. (1983) Telling it as it isn't. *British Journal of Developmental Psychology*, **1**, 121-130.

DePaulo, Kashy, Kirkendol, Wyer, & Epstein(1996) Lying in everyday life. *Journal of Personality and SocialPsychology*, **70**, 979-995.

Dews, S. & Winner, E. (1995) Muting the meaning: A social function of irony. *Metaphor and Symbolic Actibity*, **10**, 3-19.

Ekman, P. (1985) *Telling lies*. New York :Norton (工藤 力訳 1992 暴かれる嘘 誠信書房)

Ekman, P. & Friesen, W. (1969a) The reportoire of non-verbal behaviour: categories, orogins usage and coding. *Semiotica*, **1**, 49-98.

Ekman, P. & Friesen, W. (1969b) Non-verbal leakage and clues to deception. *Psychiatry*, **32**, 88-106.

Ekman, P. & Friesen, W. (1974) Detecting deception from the body or face. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 288-298.

Ekman, P., Friesen, W., & Scherer, K. (1976) Body movement and voice pitch in deceptive interaction. *Semiotica*, **16**, 23-27.

Ekman, P., Friesen, W., O'Suillivan, M., & Scherer, K. (1980) Relative importance of face, body, and speech in judgements of personality and affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 270-277.

Gibbs, R. (1983) Do people always process the literal meanings of indirect requests? *Journal of Experimental psychology :Learning,Memory,and Cognition*, **9**, 524-533.

Gibbs, R. & O'Brien, J. (1991) Psychological aspects of irony understanding. *Journal of Pragmatics*, **16**, 523-530.

Gibbs, R. (1994) *Poetics of Mind :Figurative Thought, Language, and Understanding* Cambridge University Press, Cambridge.

Gibbs, R., O'Brien, J., & Doolittle, S. (1995) Inferreing meaning that are not inented: Speaker's intentions and irony comprehension. *Discourse Process*, **20**, 187-203.

Grice, H. P. (1975) *Logic and Conversation*. In P. Cole & J. Morgan (Eds.), Syntax and semantics: Vol. 3. *Speech acts* (pp. 41-58). New York: Academic Press.

橋元良昭 (1989) 背理のコミュニケーション ――アイロニー・メタファー・インプリケーチャー―― 勁草書房

橋元良昭・村田光二・広井脩 (1985)「間接的発話行為――その発展」(武藤隆編・文部省科学研究費特定研究報告『会話能力の発達段階』)

石野秀明 (1996) 皮肉と嫌みは同じ概念か？――アイロニーの二面性に注目して―― 日本心理学会第60回大会発表論文集, p. 852.

Jorgensen, J., Miller, G., & Sperber, D. (1984) Test of the mention theory of irony. *Journal of Experimental Psychology :General*, **113**, 112-120.

Kashy, A. D., & DePaulo, B. M. (1996) Who lies ? *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1037-1051.

Kreuz, J. R., & Glucksberg, S. (1989) How to be sarcastic: the echoic remider theory of verbal irony. *Journal of Experimental psychology :General*, **118**, 374-386.

Kreuz, J. R., & Roberts, R. M. (1995) Two cues for verbal irony:Hyperbole and the ironic tone of voice. *Metaphor and Symbolic Actibity*, **10**, 21-31.

Leekam, S. (1991) Jokes and lies: Chihldren's understanding of intentional falsehood. In A. Whiten (Ed.), *Natural Theories of Mind: Evolution, Development, and Simulation of Everyday Mindreading*, pp. 159-174. Oxford: Basil Blackwell.

Rosenblatt, E., Swinney, D., Gardner, H.., & Winner, E. (1987) On-line processing of metaphor and irony. Unpublised research. (Winner, 1988, pp. 154-155. より引用)

Sperber, D. & Wilson, D. (1981) Irony and the use-mention distinction. In P. Cole (Ed.), *Radical Pragmatics* (pp. 295-318.) New York: Academic Press.

Sperber, D. & Wilson, D. (1995) *Relevance :Communication and Cognition 2nd ed.* Oxford : Blackwell Publisher.

Weinrich, H. (1967) *Linguistik der luge*. Heidelberg. Lambert Schneider. (井口省吾訳　1973 うその言語学　大修館書店)

Winner, E. (1988) *The Point of Words.: Children's understanding of metaphor and irony*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Winner, E. & Gallagher, E. (1983) The role of behavioral and intonational cues in the undestanding of irony. Unpublished manuscrpt. (Winner, 1988, pp. 148-149. より引用)

Winnner, E. & Leekam, S. (1991) Distinguish irony from deception: understanding the speaker's second-order intention. *British Journal of Developmental Psychology*, **9**, 257-270.

Winner, E., Windmueller, G., Rosenblatt, E., Bosco, L. & Best, E. (1987) Making sense of literal and nonliteral falsehood. *Metaphor and Symbolic Activity*, **2**, 13-32.

（博士後期課程２回生，教育心理学講座）